

OPU Students 海外留学レポート

Study Abroad Report from the OPU students

プロフィール (Profile)



氏名 (Name) 瀬澤 恭平
所属 (School) 工学研究科 物質化学系専攻
学年 (Grade) 博士前期課程 2 回生

留学先 (Name of overseas institution)
台湾
留学期間 (study abroad period)
5 日間

記入日 (Date) 2017 年 8 月 4 日

留学レポート Study Abroad Report

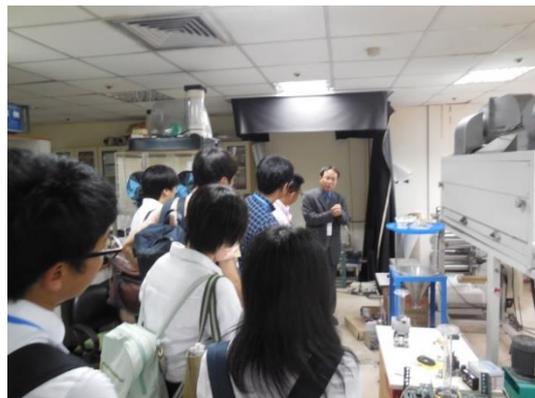
2017 年 7 月 30 日から 8 月 3 日までの 5 日間、私は APT 2017(Asian Particle Technology 2017) と呼ばれるアジアを中心とした粉体工学の国際学会に参加しました。研究室に配属されて 3 年目の私は、これまでに様々な学会に参加してきましたが、国際学会は初めての経験でした。そしてそれは私にとって大きな挑戦でもありました。というのも私は英語がとても苦手で、特にリスニングやスピーキングが弱く、人と会話するには到底及ばないレベルでありました。これまでの学生生活の中では、進級できる程度の勉強しかしておらず、今後社会に出た時に今までの誤魔化しが通用しないことは明白でした。そこで私は、今の自分の英語力でどの程度外国人とコミュニケーションを図れるのかを自覚するため、また今後の英語の勉強へのモチベーションの向上のために今回の国際学会へ積極的に参加を希望しました。今回の学会で得られた経験を以下に示します。

➤ 長庚大学

APT2017 の会場となった大学は、台湾桃園市に立地した長庚大学でした。非常に広大な敷地を有し、大きな建物と共に池や草原があり自然豊かなキャンパスという印象を受けました。長庚大学には、本学会のチェアマンである Hsiu-Po Kuo 教授の下で、私たちの研究室と同じく粉体ハンドリングプロセスについて研究する研究室があり、今回の台湾滞在期間中にその研究室の見学を行うという貴重な体験ができました。私たちの研究室と比較すると、生徒の数が少なく研究室は広かったです。またこの広いスペースがあるため、実験器具や設備は非常に充実していました。私たちの研究室と同じような実験装置を利用してはいましたが、そのメーカーに日本製はほとんど無く台湾製や中国製でした。しかし一方で、分析機器には島津製作所の物を利用しており、日本の分析機器の性能の高さがグローバルに評価されていることに非常に興味を持ちました。そして私の研究である、数値シミュレーションを用いた数値解析も同大学で行われているようでしたが、私たちの研究室ほどの規模ではありませんでした。日ごろあまり意識していませんでしたが、粉体工学の研究分野は実験が主流で数値解析を用いた手法はまだまだ浸透していないということをこのラボツアーを通して知り、非常に有意義な時間を過ごす事ができました。



長庚大学



研究室見学の様子

研究発表(ポスター発表)

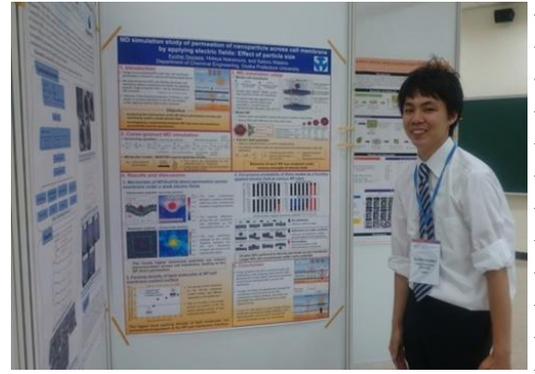
私はポスターを用いて 90 分間、研究発表を行いました。まず、英語に自信のない私が研究発表を通して思ったことは、想像していた以上に伝えたい事が発信できたのかなというものでした。当然、英語を聞き取ることができず何回も何回も聞き返し、ゆっくり発音してもらった場面が幾度となくあり、また返答も単語を並べるだけの拙いものでありましたが、なんとか言いたい事は伝えることができ納得してもらうことができました。そして同時に、もっと自分の考えを詳しく伝えたかったという悔しい思いもしました。学会のポスター発表は、口頭発表と異なり質疑に多くの時間を割けるため、他分野の研究者から自分の知らない視点からの意見を多くもらえます。しかし今回の学会では、自分の英語力の為にそうした有意義なディスカッションというのが難しく本当に悔しかったです。今後はこうした国際学会だからこそ得られた自信や悔しさを忘れずに、英語力の向上に繋がりたいと思いました

次に初めての国際学会で感じたことですが、まず初めにポスター発表会場において、ポスター製作者がポスターの前にいないことが日本の学会とは大きな違いだと思いました。日本人の多くは自分のポスターの前にいたのですが、他の国の人たちはほとんどいませんでした。また、日本人は質疑に消極的で外国人は積極的という認識は少し偏見なのだと思います。ポスターを長い時間かけて読んでいただいた人が、ディスカッションをせずに次のポスターへの移動してしまうというのは日本だけでなく外国でも同じでした。やはり、しっかりディスカッションする為に自分から声をかける姿勢は国内外問わず重要なのだと思いました。最後に、日本人には見られないような貪欲な姿勢も海外の人々から垣間見ることができました。例えば私は、「先行研究は論文で出しているのか」「この研究結果は、どのような分野の論文に出すのか」「どのような研究を参考に研究を進めたのか」「ポスターを撮影してよいか」など会話の中で尋ねられました。これらの質問はどれも国内の学会では一度も尋ねられたことがなく、私の研究についてもっと詳しく知りたい、参考にしたいという強い思いを感じました。こうした姿勢は私たち日本人も学ばないといけないと思いました。

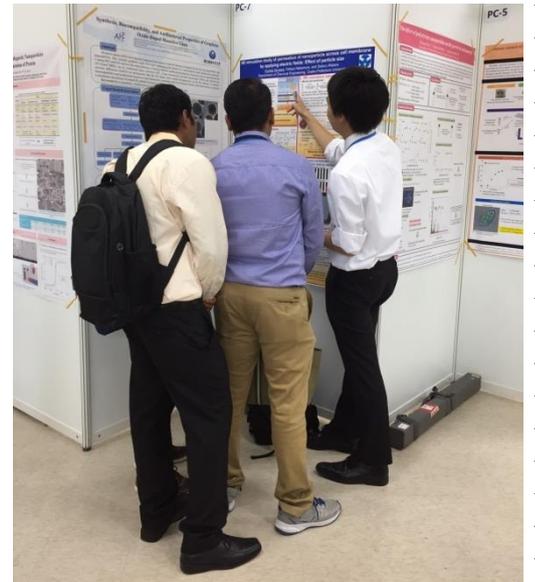
さいごに

国境を越えて最先端の科学を共有し、議論し、学び合う場である国際学会に学生の間に参加できたのは、私にとって大きな財産になったと思います。英語が苦手な私の場合、英語が拙くてもある程度は何とかなる事が分かり少し自信ができました。そのため、これまでは国際学会への参加に不安が強く躊躇してしまうところがありましたが、今は次にこのような機会があれば、是非参加したいと思っています。また滞在期間は上手く時間を作ることで、その国の観光地に足を運ぶことができます。私たちの場合は、短い時間でしたが台北で国立故宮博物館や台北 101 に訪れ台湾の文化にも触れることができ、公私ともに非常に充実した時間を過ごせました。

皆さんも今後の国際学会に参加できる機会を見逃さずに、積極的にチャレンジしてみてください。学会の研究内容以外にも語学や文化など、日本の学会では味わえないような刺激を得ることができ、今後の研究に対して間違いなくモチベーションが高まると思います。



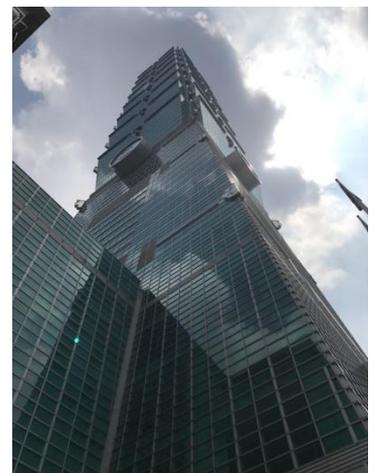
発表ポスター



発表ポスターの前で説明している様子



国立故宮博物館



台北 101